

《蒙古襲来絵詞》画面構成の特質

The Pictorial Construction of “*Mouko Shuurai*” Emaki

池田洋子

Ikeda Yoko

はじめに

1. 絵巻の現状の内容構成
 2. 絵画場面
 3. 絵巻画面構成の特質
- 結語

はじめに

《蒙古襲来絵詞》(以後本絵巻と記す)二巻は 現在宮内庁三の丸尚蔵館に所蔵されている。それ以前は、熊本の太田野家に伝来し、明治二十三(1890)年に御物となり、平成元(1989)年より国所有になった。

1300年頃の制作で 紙本に著色されている。上巻が縦40.3cm全長2450.6cm、下巻縦40.2cm全長2111.8cmである。天地が40センチほどで、絵巻としては標準より若干長めである。

合戦絵巻の部類に属し、2度の元寇の戦闘と鎌倉下向を体験した竹崎季長の視点を基に絵巻化されている。

江戸時代に多くの模本が作られた。例えば、尾張藩の建中寺本、松平定信の楽翁本、細川家の福田太華(1795-1854)模写本や永青文庫所蔵本などが知られている¹。

詞書は竹崎季長がもとの文を作成したといわれる。書風は3体あり、詞書の重複箇所は別書体であり、奥書があるがそれもまたさらに別書体である。全部で5書体ほどが区別されている²。

絵画は、伝承によると、絵師が土佐長隆・長章親子と言われる人物で、彼らは13C後半～14C前半に活躍し、朝廷と関わりがあり、知恩院蔵法然上人絵伝四十八巻の筆者の中に挙げられている。しかし、実際には画風は5種以上がみられる³。

制作場所は 都という記録が無いので、描き直しや描き込みが見られることから九州大宰府辺りかと考えられている⁴。

詞書の重複箇所の存在から元来は二組、すなわち甲佐阿蘇神社(熊本県上益城郡甲佐町)と季長子孫の双方に伝来していたが、後年1本に合体されたものと考えられている⁵。

本絵巻に関する記録は 新井白石著『本朝軍器考』と太田野十郎の書き付けた「蒙古襲来絵巻物履歴」にある

元寇は 元が日本に従属を求めて親書を送って来たが、朝廷

と鎌倉幕府が無視したため、日本に攻めてきたものである。文永十一(1274)年十月の文永の役は、高麗軍と元軍が攻めてきたものである。弘安四(1281)年五月～閏七月の弘安の役は、1279年に南宋を滅ぼした元が、その後高麗軍と南宋軍もふくめた大軍で日本に攻め込んできたものである。元・高麗軍が五月の初めに高麗の港を発って対馬や壱岐を襲った後、海上にいたところ、日本の御家人たち武士軍はその船舶に少数で切り込んで襲う程度の戦いしかできなかった。しかし、閏七月一日に台風が襲来し、海上にいたその大軍の殆どを壊滅し、その後に日本の沿岸に残っていた元連合軍掃討のために、元船に乗り込んでの戦闘が行われたものである。

本絵巻は、この戦争の全容を記録したものではなく、あくまでも竹崎季長の体験した視点に基づく彼の観た部分が絵巻化されているものである。常に中心は彼自身である。

そのことが絵巻の画面構成のありようを作りだし、それがこの絵巻の特性となっていることを以下に検討した。

1. 本絵巻の現状の内容構成

本絵巻は、昭和五十～五十三(1975～1978)年に現状保存修理がおこなわれた。傷みがひどく、紙の天地が破損したり、絵や詞書の一部または全部が失われたと考えられる部分も多い。

現状の配列は、寛政九年(1798)熊本藩が時習館で修理をした時に、高本紫溟(1737-1813)・長瀬真幸(1764-1835)らが指導して現在の配列順序にしたものである⁶。

詞書は現在14段あるがそのうち1段は重複する内容である。絵は21段に分かれている。詞書や絵の段中に白紙が挟まれていて、元来その箇所には絵や詞が存在していたが現在は散逸したと考えられている。最後に奥書が2紙つけられている。

本絵巻の絵や詞書の現在の配列状態とその内容を簡単に記す。上巻は前半が文永の役の記録、後半が季長の鎌倉下向について、下巻は弘安の役に関する内容を絵巻にしている。

上巻前半: 文永の役

—第1紙白紙

¹ 太田6 荻野12 源11 佐藤16 小松13 大蔵8 宮9

² 源11 太田6 大蔵8 宮9 小松13

³ 源11 太田6 大蔵8 宮9 小松13 ⁴ 大蔵8

⁵ 宮9 ⁶ 太田6 大蔵8

- 詞①-第2紙-博多息の浜に蒙古軍上陸の時、季長が江田又太郎秀家と兜を交換し助け合う約束をする
- 絵1-第3～7紙-豊後守護大友頼泰配下の武士のいる箱崎宮前を通る季長と将兵ら
- 詞②-第8紙-大将小式景資の前を先駆けすると申して赤坂に馳せる季長と手勢
- 絵2-第9～11紙-唐櫃に腰を降ろす景資の陣、川と住吉鳥居と松
- 詞③-第12紙-赤坂に向かう途中、蒙古軍との戦闘から帰る菊池一団に出会い駆けだす季長と手勢
- 絵3-第13紙-蒙古軍に向かう馬上の季長以下5名の一団
-第14紙白紙
- 絵4-第15紙-菊池武房配下将兵が一団となり右に進む
- 詞④-第16紙-季長が蒙古軍中に突撃し、馬を射られ危機に陥るところを白石通泰に救われる
- 絵5-第17～18紙-後方を駆ける白石通泰勢の前に先駆ける季長の旗指と手勢、
-第19紙白紙
- 絵6-第20～21紙-馬上から弓を射かけ敵を追い駆ける三井三郎資長と、松林の向こうに逃げる蒙古軍
-第22紙白紙
- 絵7-第23～24紙-矢・槍・鉄砲が飛び交う中、馬を射られた季長と、迎え射合う蒙古兵と敗走蒙古兵
-第25～26紙白紙
- 絵8-第27紙-蒙古軍の陣、網代格子の楯を並べ、その後方に戟・鉾を手に立つ兵・騎馬将兵と銅鑼・太鼓を鳴らす兵達
- 上巻後半:鎌倉下向
- 詞⑤-第28～29紙-翌年建治元年(1275)「先駆けの功」が鎌倉に届いていないと知り、六月三日鎌倉に向かう。馬鞍を路銀に、途中、熊野先達に布施し、烏帽子親三井季成に馬を餞別され、八月十一日箱根権現に着く。
- 詞⑥-第30紙-八月十二日鎌倉着、三島大社で精進、由比ヶ浜で塩湯掛け、鶴岡八幡宮に参詣祈願する。
- 詞⑦-第31～34紙-二ヶ月近く方々の奉行に訴えたが、取り合ってもらえず、再び鶴岡八幡宮に参詣。十月三日安達泰盛に話す機会があり直訴する。
- 絵9-第35～37紙-泰盛屋敷の門前から門内の建物や侍達の様子と、屋敷奥建物で泰盛に直訴する季長。
- 詞⑧-第38～39紙-翌四日泰盛館で中野藤次郎が恩賞の望みのあることを聞き、見参所で十一月一日泰盛から領地の拝領下文と馬を賜る。
- 絵10-第40～41紙-見参所、泰盛のいるところで馬を賜る季長
-第42紙白紙
- 詞⑨-詞⑦書き出し部分と同文の断簡
-第44紙白紙
- 下巻:弘安の役
-第1紙白紙
- 絵11-第2～3紙-負傷した伊予の武将河野通有を見舞って対面する季長
-第4紙白紙
- 詞⑩-第5紙-肥後の菊池武房が守備する石築地の前を挨拶して通る季長一団
- 絵12-第6～8紙-肥後の菊池配下将兵勢が石築地上に座っている前を通る季長一団
- 詞⑪-第9～10紙-五日合田遠利が鎌倉から下る。季長が自分の船が来ないので、肥後国守護安達盛宗の船に乗り込もうとしてもみ合い、その隙に乗り込む。
- 絵13-第11～12紙-漕ぎでた季長の兵船。肥田秀忠、小野大進、頼承、焼米五郎、宮原三郎らも乗船。
-第13～14紙白紙
- 絵14-第15～16紙-草野次郎経永、大矢野父子、秋月種宗(船首に合田遠俊軍奉行)らの兵船
-第17紙白紙
- 絵15-第18～19紙-松林の岸を離れた太宰少式経資、薩摩守護父子らの兵船
-第21紙白紙
- 詞⑫-第21～22紙-安達盛宗船に乗れず、たかまの船に乗り、兜代用に草摺を被り敵船に乗り込もうとする季長
-第23～24紙白紙
- 詞⑬-第25紙-翌六日関東御使合田遠俊に、昨日の合戦報告をして賞賛を受ける季長
- 絵16-第26～27紙-敵船に乗り込み敵首を打ち取る季長・大矢野兄弟など日本の武将が乗り込んでいる状況と、敵船の太鼓や銅鑼を鳴らし旗を振り弓を構える将兵
- 絵17-第28紙-弓を構え応戦する敵船
-第29～30紙白紙
- 絵18-第31紙-敵船の旗がなびく様子
-第32紙白紙
- 絵19-第33～34紙-弓はもつが、兜もつけずに座っている敵船内の状況
- 絵20-第35紙-志賀島大明神付近の取り残された蒙古兵
-第36～37紙白紙
- 詞⑭-第38紙-季長が息の松原で守護に見参して、将兵の戦

功を『引き付け』（戦功記録）に記された

絵21-第39～40紙-守護安達盛宗の陣所で、季長が敵首を差
しだし戦功報告し、執筆が書き付ける

-第41紙白紙

詞⑮-第42紙-奥書I-文永の役で恩賞を下賜された者で直接
下文と馬を賜ったのは季長一人だから、大事の時は真っ
先に先駆けすべきである「永仁元年二月九日」

詞⑯-第43紙-奥書II-甲佐大明神の夢告で、関東出訴所領
安堵となった神恩の尊さ記す「永仁元年二月□□」

2. 絵画場面

1の現状で見た絵画は紙数順に記したものであるが、場面
を考えると紙数順の何段かが絵のつながりから大きく纏まる。詞書
の14段と同数の段がまとまりある絵画場面の段数と考えられる。
ここでは15段にまとめた絵画場面（以後場面とのみ記す）を考え
ていく。

上巻

【場面1】	詞①に対し	絵1	5紙
【場面2】	詞②に対し	絵2	3紙
【場面3】	詞③に対し	絵3・4	2紙（現状白紙1紙を挟む）
【場面4】	詞④に対し	絵5・6・7・8	7紙（現状白紙4紙を挟む）
【場面5】	詞⑤⑥⑦に対し	絵9	3紙
【場面6】	詞⑧に対し	絵10	2紙

下巻

【場面7】	相当する詞無	絵11	2紙
【場面8】	詞⑩に対し	絵12	3紙
【場面9】	詞⑪に対し	絵13・14	4紙（現状白紙2紙挟む）
【場面10】	相当する詞無	絵15	2紙
【場面11】	詞⑫に対し	絵16・17	3紙
【場面12】	相当する詞無	絵18	1紙
【場面13】	相当する詞無	絵19	2紙
詞⑬には相当する絵無			
【場面14】	相当する詞無	絵20	1紙
【場面15】	詞⑭に対し	絵21	2紙

上巻前半：文永の役

【場面1】

画面の天地に傷があり縦幅が短くなっている。更に、画面上下
端に霞がうっすらと引かれている。

画面上部三分の一に、二重板屋根の門、網代の垣根、舞良戸
を閉めた板屋根と廂の家屋が描かれる。この建物の左端近くに

縦に大きく食い込む傷があり、この傷はある幅を保って繰り返す。

建物が終わるところから、画面中央部に騎馬の武者達が左と
進む。最後尾の武者は馬の尻尾がほぼ真横に靡いているその
前の二人の顔にも緊張した面持ちが見られる。しかし、後向きの
騎乗武者の体の向きが右方に向いていて、その馬の尻尾が左
右に振れていて馬が顔をあげて堂々とした様子で行進しているこ
とを表現する。この五頭の馬はすべて画面左へ進む。馬の色は
薄茶、黒、茶、濃い茶、白と皆異なっている。

騎馬武者の装備は、鎧星兜、弦巻、太刀、背に矢箆、手に弓と
同じである。しかし、鎧緘の色が、黄色、朱色、茶色、青、赤と異な
る。先頭の武者は旗差し物を左手にもつ。

画面下部の馬の脚の下あたりの位置に朱色の二重の神垣が
ある。先頭の旗指し武者の辺りから、画面最上部にずっと海の波
が描かれている。その後、鳥居とその手前と奥に松が二本ずつ
描かれる。鳥居の下部の画面に大きく損傷がある。

再び、画面下部に朱色の神垣が描かれる。この上部に騎馬武
者五人と腹巻姿に歩く軍兵二人を描く。騎馬武者は鎧星兜、弦
巻、太刀、背に矢箆、手に弓馬と前述の武者と同じ装備である。
すべて画面左に向く馬の色は濃い灰色、緑茶色、濃い茶、白、薄
茶で馬脚がすべて黒く、先述の馬とは異なる。鎧緘色も、茶・緑・
朱・青・赤と異なる。先頭の騎馬武者は旗差し物を持つ。腹巻姿
の一人は薙刀をもつ。

画面下端に、根を張った松が幹を大きく斜めにして描かれて、
松林が始まり、その奥を騎馬の武者が進む。画面上部の空間的
に最奥にあたる部分に海の波が描かれる。松林と海の水際の間
を騎馬武者が進んでいることを表現する。五騎が大きな松の木
隠れを進む。竹崎季長を描くところでは、松が低くなって顔をはっきり
と見せている（図1）。画面左端は松で終わる。

前述の二団の武者達は塊になって描かれていた。しかし、竹
崎季長の一団では一騎が最後尾に離れていて、次に三騎が連
続し、先頭の旗指しが少し間を置いている。彼らは、塊ではなく一
騎ずつを意識して近接して描いている。

馬の色は後から焦茶・茶・黒・白・灰色である。緘色は、後方の
腹巻が白に朱と次は剥落して不明で、季長と義理の兄資長の鎧
が緑で、先頭の腹巻が黄色である。腹巻の緘が朱と白で色分け
になっている細かなところまで描き分ける細心の注意が払われて
いる。

【場面2】

少式景資を中心にして左右に座す鎧武将が画面右方向を見

つめている(図2)。少武景資は烏帽子を被り、緋緘の鎧姿で、鎧唐櫃に腰を下ろし、弓を左手に持ち、右に金色の○を描いた扇を手にする。顔は白く塗ってある。景資の左脇の画面右にいる四人は右から緑・朱・茶・黒緘の鎧を着け、画面左の武将は緑緘鎧を付けている。一番右端の武者や左の武者の手が白く塗られていることから当初は武者の顔や手を白塗りにしていたらしい。その左に整然と二列に並んだ六人の鎧武者が着座する。

彼らはいずれも、画面の上半分に配置されている。

彼らの前すなわち画面下半分には、腹巻姿の兵が鞍の下に虎皮を敷く茶色の馬を曳いて右に歩む。その左には座っている二人の兵、その左に、薄茶の馬と茶の馬を曳く腹巻姿の二人の兵がいる。

画面の上下の端には薄藍の霞が写|かれる。

この場面の左には、画面上端から下端まで左下がりの斜線になって細い川が流れている。その左、紙が変わって、住吉神社の鳥居が、続いて松が5本描かれている。

【場面3】

まず、疾走する茶色の馬に乗る腹巻姿の武将と疾駆する白馬に乗る緑緘鎧兜の武者が描かれる(図3)。その左の騎馬の腹巻兵は茶色馬を止めようとする。その右奥の黒馬に乗る腹巻姿が持つ旗差し物は、竿近くでは竿に絡みつのように垂れさがるが、その先端は風に靡く。先頭の緑緘の鎧に赤の兜の季長は、すでに茶色馬の歩みを緩めて止まるところである。

彼らの足元にはところどころ緑の絵具を掃き、大地を表している。季長のいる画面の上部には丘があり、そこに別の鎧兜の武者が描かれている。

白紙を挟んで続く場面は色の剥落があり、はっきり見えないが、画面下方は丘状の線に隠される。その上に鎧兜の武者達が乗った白・薄茶・黒・灰色の馬の頭が右向きに並んでいる。この左に馬の頭部が見え、最後に後ろ姿の鎧兜武者が尻を見せた馬に乗っている。彼らは、一纏めになった塊を形成している。

【場面4】

大きな塊となった鎧兜武者の一団が弓を構えながら疾駆していく(図4)。彼らの乗る馬の色が、薄緑・薄茶と白・薄茶・茶・焦茶・黒・黄土などすべてが異なる。鎧の緘の色も赤・朱・黒・緑・茶など異なるほか、糸の配置の様相も異なり、同じ鎧が無い。

この集団の中で、先頭に行く武者達は、弓を大きく引き絞り今にも矢を放そうとしている。その後方の武者らは弓を構えようとし、更に後の者たちはこれから弓を構えるため敵を見定めている。集

団内の行為の違いを表現している。彼ら一団の先頭に、旗指し物が大きく風に靡かせて真横になるほどの速さで駆ける武者がいる。この旗指の前方に矢が画面上方に多く、下方にも二―三本描がれている。飛んでいる矢か落ちていた矢か両者の違いがはっきりしない。

少し間をあけて、馬が血を噴き出して、後足を蹴り上げ頭を降ろした姿勢で描かれる。その馬の画面の上部に旗指し物を掲げて腹巻姿が走り、その左には疾駆する馬に乗る武者姿が半分だけ残っている。

白紙の部分を過ぎると、資長が疾駆する馬上に弓を構える(図5)。少し間を開けた画面左に、兜や鎧に矢が刺さったままの兵、後を振り返る兵など蒙古軍の兵八人がばらばらと走って逃げていく。手には先が菱形になった長い槍・先が三俣になった鉾・持ち手部分がへこんだ短めの弓を持っている。先頭には弓を手に騎馬で駆ける兵士が行く。

この駆ける兵士の画面上方には、霞がかかり幾重にもなる丘に松林がある。

短い白紙をはさんで、松の幹が直角に屈曲した所に、後脚を大きく蹴り上げた転倒寸前の馬に季長が乗っている(図6)。馬の後脚の腿の矢が刺さりそこから血が噴き出し、地面に血溜まりができるほどの量である。馬から振り落とされないようにと、季長は手綱をしっかり握っている。季長の足も着物の上から矢が刺さり出血している。彼の上方を大量の矢と槍さえも飛んでいく。

季長に向かい合う蒙古兵の三人は矢を放ち、弓を大きく引き、鉾を投げようと構える。

その後には左方へと逃げようとする矢の刺さった兵や盾を担ぐ兵、鉾を抱える兵などがいる。彼らの向かう先には右に向けて弓を引く兵がいる。その後ろに大勢の兵士が集まってきている。

白紙を挟んで、松の木の左に、一面に盾が重なるように並べて隙間ない壁を作った奥に、蒙古軍がひしめきあう。先端の形が様々な槍状の武器を立ち並べた兵士たちの後ろに、銅鑼や太鼓を叩く姿が見える。同じ画面の下半分には馬に跨り駆けだそうと準備する者たちもいる。その後ろ画面左端に松の梢がみえる。

上巻後半:鎌倉下向

【場面5】

馬の轡を取り、静めている侍烏帽子に直垂姿の男二人がいる。築地塀の前の溝に架かる板橋を渡ると、門を護る直垂姿の三人の武士が、話をしている。門内の塀沿いも直垂姿の二人の

男がいる。

画面上半分に建物があり、柱間に直垂姿で侍烏帽子を冠る者や剃髪した者など一人ずつ、板敷きの室内の縁に近くに敷かれた畳の上に座っている。なお、家の者の直垂の袖は小袖に描かれている。

中庭を区切る網代の中門扉前に、二人の直垂姿の武者が地面に着座している。門内の格子を上げた建物の簀子の縁寄り敷かれた高麗縁の畳に直垂姿の三人が座って、季長が身を乗り出して熱心に話すところを注目している。建物の一番奥には安達泰盛が画面右向に座り季長に向き合う。畳上の武士たちの直垂は大袖である(図7)。

【場面6】

上部に霞を大きく描き、上げた格子もなく上長押だけの建物の縁際の畳に泰盛が座っている。建物の曲がり角に泰盛舎弟が座り奥を見つめている。庭では季長が馬の手綱を握っている。その左に馬を運んできた左枝五郎が季長を見つめている。この人物たちも侍烏帽子に直垂姿であるが、直垂の袖は大きく大袖に描かれている、季長の直垂の袖は特に大きい。

場面5と場面6は同じような環境モチーフと人物モチーフだが、明らかに異なる表現をしている(図8)。場面5の生き生きした人物たちの表情は場面6にはない。

下巻-弘安の役

【場面7】

最初の紙面のみ上部全体と下端から中程まで細長い部分的な損傷部分が繰り返し四か所ある。

画面上半部に建物があり、板敷きの室内に簀子縁近くに敷かれた畳に赤糸緞に烏帽子姿の季長が、扇子を手に持ち幾分右斜め向きに坐す。一方、河野通有は、画面上の書き込み通り烏帽子をかぶらずに髪を束ねただけの直垂姿で、季長に向き合っ

て座っている(図9)。右下の損傷のある部分に、弓を持ち、黒い太刀を佩く人物の一部が描かれている。左の簀子縁上に、嫡子八郎は若武者らしく赤い地色の上に緑色の文様の直垂を着て、緑色の緞鎧の一部(右足上)を付けている。顔も若々しく描かれている。

次の紙は損傷が殆ど無い。

赤い腹巻姿の兵が旗指し物を高々と掲げて庭に片膝でいる。簀子が続く角を曲がった際に二人の鎧兜の武者が話している。

【場面8】

画面のほぼ中央に石築地がずっと続く。その石築地の上に様々な鎧姿の武者たちがゆったり並んで座っている。その武者たちの後方に松林が続いている。後向きの緑緞の鎧の武者から始まり、赤、濃緑、さまざまな色からなる緞の鎧と続く。松の木を挟んで赤、緑、寒色系のグラデーションの緞、茶色、薄緑の緞の鎧武者が並ぶ。茶系のグラデーションの緞、朱と肩から斜めに色を切り替えた緞、鮮緑、茶に肩からV字型に色を切り替えた緞などの鎧を付けた武者たちが並ぶ。この鎧の糸の色彩が武者を区別するが、彼らは一纏めに扱われている。

画面下半分、石築地上の武者前を季長主従が行く(図10)。季長主従の乗る馬は焦茶・灰色・白・黒・茶色・先頭に薄茶と異なる色である。以前の合戦にはなかった腹巻で徒歩の兵がいる。黒馬と先頭の旗指しの表現に彫り塗りが使われる。季長らの一団は一人一人扱われている。

【場面9】

画面の上下に霞が何本も引かれる。画面下半分にだけ松林が横に伸びる。松林の上には霞が何段も掛かる。画面上半分は海になり、浮かんだ舟の前半分に武者が乗り、後方には舟を漕ぐ水手六人が廬を漕いでいる(図11)。舟の舳先に乗る武者たちには緊張した表情があるのに対して、水手たちの表情はあかるく楽し気でさえある。武者の周りの舟縁には盾が並んでいる。画面左端は松林の松の描写で終わる。

白紙を挟んで海に漕ぎ出る三隻の舟を描く(図12)。小さな舟に水手と共に、乗舟の兵も一緒に漕いでいる。右の舟には赤のグラデーションの鎧兜の上方に「草野の次郎経永の兵船」と、中の舟には赤の緞の鎧武者の上方に「天草の大矢野十郎種保同三郎種村兵船」と書かれている。左の喫水が深いらしく、人物たちが頭だけを出している舟は「合田五郎遠俊の手の者」とあり、関東から派遣された奉行合田氏の舟である。彼らの鎧はグラデーションの色遣いをしている。更にその舟の前にも舟があることを示す様に、画面左端に舟の最後尾が描かれて終わっている。

【場面10】

土手の上に松が生え、岩場に波が打ち寄せている景に始まる(図13)。画面を上下二段にして、二隻の船が描かれる。下半部にある船の舳先がやや左に先んじて、船尾に舳を曳いている。場面9の舟に比べて大きい船に溢れるばかりに武者たちが乗り、船の後部にある張り出して水手と兵が必死に櫂を漕いでいる。先頭の旗指し物が強く横に靡いている。旗指し物を掲げる竿の

横に櫂の先があり、描かれた二隻の船に先行する船の存在を示す。画面左端下にも櫂の先があり、複数の船が先行することを暗示している。波の線が殆ど無く、薄藍が刷かれる静かな海である。

旗指し物は、左の船では真横に伸びるが、右の船では初めは竿に絡みつきながら旗布の先端は横に靡いている。この二隻とも左上方向に進もうとしている。

【場面11】

舳から熊手を突き出して元船に掛けている。そこから鎧兜の武者が元船に乗り込もうとしている(図14)。その元船の中には、乗り込んだ武者たちが、船尾で太刀を手にして、船倉から次々に繰り出す元兵と対峙している。船首には、すでに敵兵の一人を倒して次なる兵の首を切ろうとする武将がいる。その元船は網代の船壁の間に船室の窓が見え、そこから元兵の顔が見える。船尾は一段高くなっている。

その左に、画面を上下二段わけて各々に元船がいる。上部の二隻は 後方に向けて矢を射かけたり、鉾を構えたりするほか、銅鑼や太鼓を鳴らしたり、旗を振ったりする情景が描かれ、戦いを挑んでいる様子が表現される。中には、矢が当たって血を流す者、口の横に手を当てて何事かを叫んでいるらしいものなど、細かなところにも注目している様子がわかる。その傍らでは水手たちが必死に櫂を漕ぐ様子が描かれる。

後方に注意を向けているということから、逃げていく様子を表現しているものと考えられる。

この上下二段の船を分ける霞は、下の段の船の船尾から舳先まで横線を引いたように藍が塗られていて、上段に描かれている船の舷がその藍色の霞の中に消えている。

紙継ぎの後、船体に矢が沢山刺さった舟に大勢の元兵が乗っている(図15)。血を噴出している者もいる。舟に乗る兵たちの顔がいろいろある。前の場面では、人物が皆同じような顔をしていたが、こちらの舟の中では異なる顔つきがある。多国籍軍の元軍が文字通り色々な顔の民族で出来ている様子が知られる。

上方の舟では、大きく掲げている旗が、舟から外に靡いている(画面上を左から右に向かっている)。舟は止まっているのか、或いは、画面左に進んでいるらしい。しかし、右側が舳先であることは、盾が並んで置かれることや、櫂が反対側の左の方にあることからわかる。

一方、下半部にある舟では、旗を持った兵が大きく振りかざしている。旗が上の舟とは反対の方向に靡いている。櫂の向きも左に進んでいるような向きを示している。

【場面12】

二枚の白紙の後に船の端らしいものがある。霞の色が藍にやや赤みを帯び、霞の縁の白い胡粉線に金泥線も加わる。何重にも重なる霞の間に、山形の淡い墨線の静かな波の海がある。画面左に舟の舳先にいる兵が旗をかざした左後ろに、舟周に沿って盾を並べ廻した中で、じっと右を見つめる兵士たちが立っている。その上方にも舟の一部と風に靡く二本の白い幡が見える。

【場面13】

何重もの霞で画面を上下二段に分けた間に船首・船尾に楼がある大きな元軍船三隻が描かれる(第27紙と同構図)(図16)。船尾に盾を並べた中にある兵士たちは鎧も兜も脱ぎくつろいでいるが、船の後方をじっと見つめて警戒を怠りなく続けている様子だ。 頭頂部を剃り、残りの髪を後ろに纏めた後、脇に持ってきて輪を作って耳の前に垂らす変わった髪型と、垂頸の襟元が見える。

画面上部の左の船は、一番舳先の旗を立てるポールに綱が巻つけられて錨を上げている。乗っている蒙古兵が手を額にかざすなどして、左前方を見つめる。同じ場面の他の二隻に乗る兵とは異なり、その表情も和らいでいるように見える。船の前方は棚引く霞で終わる。

後方二隻は、乗船する兵が戦時の衣装を解いてはいるが、後方を意識しながら緊張の表情を見せている。

【場面14】

画面下方の岸の上に鳥居があり、その裏に掛る霞の上が山の情景である。山かげの茅葺屋根の建物の奥、崖上に蒙古軍の赤い鎧兜の武将とその配下らしい兵たちがいる。一人は当たりの様子を額に手を当て見まわしている。さらに彼らを取巻いて兵士が配置され警戒を怠らないようにしている(図17)。

鳥居の左、霞の上下に志賀島大明神の栓皮葺屋根の社と階段が見える。その脇の入江の水に入っている人物と、水に入ろうとして衣服を脱いだ状態の人物が岸にいる。画面上端は霞で隠されている。

【場面15】

画面上下端に霞が引かれる。右画面の中程に直垂姿の人物が三人座す(図18)。画面上半部に、藁を葺いて柱を立てて雨をしのぐだけの簡素な建物の下に、右脇に脱いだ鎧兜などを置いて左肩を脱いだ直垂姿武者・盛宗が画面左方に向けて座っている。鎧兜の前には、頸が二つある。その左に、赤糸織の鎧を付けた季長が座し向かい合う。盛宗の下方に、黒直垂姿の人物が、

右膝前に硯や筆を置き、左手に紙を、右手に扇を持って座し、二人の会話に耳を傾けている。

3. 絵巻画面構成の特質

1) 詞書に対する絵画場面の長さ

詞書一つに対し絵画場面は紙1紙用いるのが最小単位である。1紙を用いた場面は2、2紙が6、3紙が4、4紙が1、5紙が1、最長絵画場面は7紙つないで用いている。しかもこの紙数の間に白紙が入っているので、実際はもっと長いものであったと考えられる。現在の状況で、間に白紙を挟み込まないで連続した絵画場面は最長5紙が、次に3紙連続となる。

これがこの絵巻の最大の特質である。絵画場面の長さが1紙で終わることなく、連続させた長い紙面に一場面を構成して描く。すなわち、一つの絵画場面がずいぶん長い画面を前提にして紙を用意しているのである。

2) 絵画場面構成の基本的な考え方

5紙を費やしている場面1は、箱崎宮前を通る将兵たちの場面である。その中に、季長一家の団も描かれている。数多い武将兵士団の中の一つの単位に季長の一家が含まれていることがわかるような描き方である。

やはり長く3紙を費やす下巻の石築地場面では、石築地の上に菊池勢が延々と坐しているその集団の前を季長一家の団進みゆく場面である。

前巻の季長の奮戦を描く場面4は、白紙の部分を含みこんでいて、更に2紙ずつを単位にしながら、順序もやや曖昧で、断絶を伴うが現状で合計7紙を連続させて、後詰めの白石軍・季長一団の個々の奮戦・退散する蒙古兵達が描かれて残っている。

前巻の泰盛屋敷の場面6は、屋敷前に主人を連れてきた馬の世話をしながら主人を待つ侍、門を護る侍、侍たちのいる建物を抜け、屋敷の最奥の建物に泰盛に直面する季長までを3紙を使って連続した一枚の絵画を構成している。

このように、長い画面に連続した情景の空間を描き詞書に書かれた内容を表現する。

3) 長い画面に描く絵画時空

長い紙面を使って絵画場面を構成しているが、同一人物が複数出てくるような場面は現状ではない。時間的推移に従って長い画面に人物や物を配置する構図ではない。すなわち長大な画面を使っているが、時間の進行を表現してはいない。時間的な展開ではなく空間の広がりを描写する絵巻である。

例えば前述の場面6、泰盛屋敷の情景では、屋敷の外から一番内奥の主人のいる空間までの情景や距離が示されている。屋敷の内外の状況が如何になっているかを絵画で表現する。屋敷の堀の外には、馬が止められていて轡を持つ従者が世話をしながら主人を待つ居る様子が表現される。門には番をする武士が地面に座って楽しそうに仲間と語っている様子が生き生きと描写されている。屋敷内に入ると建物の中に、泰盛に面会に訪れた者たちが、面会までの時間を人々と話をして過ごし待っているさまがやはり表情豊かに描かれている。更に続く面会の場にも、人々が季長が身振りを加えながら話す様に注目している様子が描かれる。

ここには、季長が屋敷の外から内奥に移動し、泰盛の前で話をするという一連の行動に注目した表現がない。季長がどんな情景の中にいたかを詳しく説明する作画態度である。ここで作者にとって重要なのは季長を取り巻く周囲の情景であり、それを詳しく説明しようとする意思が見られる。

それは場面9の石築地に見られる菊池武房勢一団の表現も同じである。菊池勢の規模の大きさを詳しく描くために長い画面を用意して、次々に空間が展開するにもかかわらず、その情景の中に常に菊池の勢力が居て、それがずっと続くことでその勢力の大きさ兵員の多さを示すものである。

同じ態度は、場面1の松林を抜けて進む軍勢の情景にも見える。松林と海に挟まれた海岸沿いを軍勢が進むことはよく説明されていて理解できる。しかし、手前の松が大きくて、松林の中を進む武者が松の陰で見えないほどである。その中で、季長だけは、その前の松の背丈を低くして、顔や姿をはっきりと表わそうと描写している。その顔は緊張した面持ちを表している。画面の始まりも、箱崎の鳥居からでなく、その神社の社屋らしきものから始めて、空間により説明的な要素が見える。また、進軍して行くだけの時なので旗指し物もはためかない様な持ち方をするなど、細かくその状況を描写する態度が見られる。

場面2の景資の本陣は、博多にあり、前場面の季長たちが向かって来るのを待っている様子が見られる。しかし、ここでは五百騎の勢兵に相当するような多数の兵を描いてはいない。画面には、川が描かれ、その先に住吉神社の鳥居が描かれている。この川の近くまでこの軍勢が続くことを暗に示す表現になっている。以上から、長い画面を費やして空間の広がりを確保して、そこに状況を説明するための必要なモチーフすべてを構成していく態度が基本的に見られる。しかし、そこに同一モチーフの繰り返しはなく、時間の進行は表現されず、ある一つの時にだけ、時間的には限定されている。

では、この基本的な原則による長い画面は、どのようにモチーフを組み合わせて構成しているか、その際どんな工夫や画面の使い方が見られるかを検討する。

4) 画面構成の工夫①武士の表現

合戦絵巻の代表的な平治物語絵巻における武士の表現は、基本的に一塊の集団として描写されるという特性があった⁷(図19)。本絵巻に於いても同じように場面1・場面2・場面3・場面4・場面8・場面9・場面10・場面11に、それぞれの鎧兜の武士集団が見られる。

しかし、竹崎季長一団は、この一纏りの武士の集団という表現が適応されていない。場面1に於いて、単なる進軍という行為に於いてさえ纏りを構成しているのではなく、右から二人・三人・間をあけて一人というようになりバラけていた。

絵巻の中に、集団としての武士団と、季長という個人を意識した表現が見られる。

伝統的な武士の描き方としての集団表現は保ったまま、新しく個としての意識が表現の中に芽生えている。この個に対する意識は、武士の形は同じでも彼らの着る鎧の糸の色やその配色の仕方の違いに目が行っていることから知られる。また、皆が同じ色の馬に乗るのではなく異なる色の馬に乗り、馬そのものの差別化もあるが、同時に個を示すことになっている。

このことは、武士団の中の事情に詳しく、それが描写の違いに明瞭に見られる程、絵師が武士の階級に接近していたことをも表している。

5) 画面構成の工夫②同種モチーフの動作の表現の違い

この武士を表現する集団の構成自体にどんな工夫が見られるのかを検討する。

場面3は季長勢が一纏りになって駆けていくと菊池勢に出会うところである。季長勢の馬を後から順にみると、疾走する2頭、その前の前足を上げて急に止まろうとする2頭、先頭のすでに歩みのとめられた馬である。急に止まろうとするので、旗指し物の布の前の方はだらりと下がるが、後はまだ後方に靡いている。先頭の季長はすでに馬の歩みを抑えている。この三つの馬の動きが一枚の紙の中でしかも一つの集団の中に、連続して描写されている。

次の場面4の冒頭は白石勢の騎馬集団が駆けていく。集団は弓を引いているが、前述したように、最後尾の武者達の列はまだ敵に狙いを付けているだけだが、中の列は弓を構え始め、最前列

は弓を引き絞って今まさに矢を放つ瞬間を描く。騎馬武者が矢を射る前の3つのポーズを描いている。ここでも1枚の画面中に一集団に一連の動作が順を追って描かれる。

この集団の前には、馬を射られたと同時に跳び下りてすでに走っている旗指、その前を駆ける騎馬武者、更にその前を行く三井三郎資長が弓を引き絞っている。(この間に白紙が挟まれている)その先に季長を乗せたままの馬が射られている。

その直前に蒙古兵が三人季長の方に弓や槍を構えている。この3人については後から付け加えられたものと言われている⁸。このことは構成と大きく関わるためここで検討する。この三人の衣服を縁取る線はすぐ左の兵士のそれを縁取る線とは明らかに異なり、太く細く一本の線の太さが変化し、しかも線の書き始めに打ち込みが見られる。着衣の裾の翻り方の表現が他の兵士の物と異なり激しい反り返りや運動感が見られる。彼らが腰に差している黒く塗られた刀の鐔が分厚いことや、周囲の兵士たちの付けている兜や鎧・靴などの服制とこの場の三人だけ異なっている。以上の点から絵巻制作とはほぼ時を同じくしての訂正とは考えにくい。後世に描き加えたものであろう。しかし、いずれにせよ訂正であるので、当初の絵巻制作者の意図を変える物であり、この場ではこの三人を除いて検討すべきと考えられる。

さて、この三人を除くとほますべての元兵は自軍の方へと撤収していく。兜や鎧に矢が刺さっている者や、盾に矢を受けてそれを担いで逃げていくものなどほうほうの体で自軍の陣地へと皆が退く。中には追手に向けて矢を射かけて撤退する者を援護している者もいる。

後方から白石軍が弓を構えて迫り、その前を季長一団が敵に向かって進んでいく。その先頭を切る季長が馬を射られている。彼を襲っている三人の元軍兵士がいる様に描かれるが、実はあとで加えたならば、季長の前は逃げる元軍が見えるだけである。ところが、現状は季長の後方にも逃げる元軍がすでに描かれている。するとここに初めてこの絵巻の今までの構成方法と異なる繰り返しが見られることになる。そこで、ここはもともと元軍を追う資長の画面が季長の前にあった方が作者の構成原則通りとなる。

この段の最後は元軍の陣地の様子を描いて終わる。

季長勢が元軍に戦いを挑み、矢を射られて負傷するが、白石勢に救われる場面を、説明的に長く描写している。この場面では、季長が馬を射られている瞬間が、場面の時の中心として構成されている。

⁷ 宮10 池田19 ⁸ 大蔵8 佐藤16

場面9は詞書に「同五日」とあるが、これが六月か七月か閏七月かが不明である。海の場面で、松林の奥から船を漕ぎだす場面に始まる。この舟に季長が乗りこんでいる。白紙を挟んで、同じような舟が続々と漕ぎだす。波が殆ど無いにもかかわらず、旗指し物が大きく横に靡いて舟の速さを表している。霞が何本か画面に引かれていて、広い範囲に広がって舟が進んでいることが表現される。季長が乗り込むまでにいかに多くの舟が漕ぎだしたかが表現される。この場面でも、季長の行動の時点が場面の時になっている。

場面10 静かな海に、大きな軍船が二隻岸から漕ぎだす。旗指し物が左の船は横に靡くが、右の船は竿に撒きつく部分を残す。

場面11 熊手を掛けて元船に乗り込み闘うところで、乗り込もうとする者、乗り込んで元兵士に刀を向ける者、元兵士の首を切ろうとする季長など描く。ここでも季長の戦う時が中心となる。その時、そのほかの元船三隻の様子が描かれる。

場面12 海や舟にかかる霞に淡い赤と金泥が加わる。舟上の元兵は後を見つめる。

場面13 三隻の元軍船上の兵が兜鎧を脱いでも、後方を怠りなく警戒するように見つめる。最前の一隻上では前方を見る兵士がいる。

場面3や4に典型的な武士の集団的な表現の中に、馬の走りの違い、弓を射る人物の動作の違いがある。また船の上の人物の動作の違いなどにも、同じ時間を共有する者が、それぞれの場所に於ける微妙な動作の違いで表現されている。

長い画面を使って、一つの時に起こりうる所属する空間の違いから生じた微妙な動作の違いで、短い空間分割の中に構成されている。説明的でありながらも、情景の微妙な相違が考慮された表現である。

6) 画面構成の工夫③画面の上下の区分

本絵巻はモチーフの画面上での構成に於いて、画面上下の二段を意識している。下巻の場面11・13の元船の構成や場面8石築地による上下の分割、上巻の場面4の蒙古兵が上下二段に分けて撤退する場面に明快に意識されていることがわかる。

結語

本絵巻は一つの時における広い空間を長い画面に描き切るという考え方が基本にある。一つの時の狭い空間での行動で

はなく、広い情景空間内での出来事を見ることになった絵師の作業である。しかも、その空間は手前と奥という奥行きを意識も持って描かれる。それが、上下二段のモチーフ配置である。また伝統的な武士を一塊に構成するという表現が、その中に異なった動きを持つ人物で構成されるという、同じ空間の中の位置の違いという意識もみられる。これはまた個性とか個というものに目が行っていることから生まれてきた表現でもある。

それが特化したものが、背景の中に纏る武士団とは異なる、主人公としての武士季長の活躍が、明瞭に区別してと入り上げられている。

本絵巻の長い場面は 戦争で活躍した季長のある行為が、どの様な状況の中で行われていたかを、状況を明らかにする詳しい描写で表わそうとした意思の反映と考えられる。季長一人の動きそのものと、同時にそれを取り巻く情景の双方に興味を持っている作者が作ったものである。状況を描くに当たり、画面の広さだけでなく、奥行きや大気的光などにも興味を持って表現されている。

これらが、本絵巻の作画態度を考えるに当たり、基本的な絵画構成を分析することで、明らかになっていった。

参考文献

- 1 黒田俊雄 蒙古襲来 中公文庫 1974.1
- 2 新井孝重 蒙古襲来 吉川弘文館 2007.5
- 3 関幸彦 神風の武士像—蒙古合戦の真実 吉川弘文館 2001.6
- 4 南基鶴 蒙古襲来と鎌倉幕府 臨川書店 1996.12
- 5 三浦周行・黒板勝美・三上参次 弘安文祿征戦偉績 富山房 1905.4
- 6 太田彩 蒙古襲来絵詞 日本の美術414 至文堂 2000.11
- 7 水野忠央編 蒙古襲来絵詞 丹鶴叢書8 臨川書店 1976.4
- 8 大蔵隆二 蒙古襲来絵詞を読む 海鳥社 2007.1
- 9 宮次男 蒙古襲来絵詞について 日本絵巻物全集9 角川書店 1963.12
- 10 宮次男 合戦絵巻 日本の美術146 至文堂 1978.7
- 11 源豊宗 「蒙古襲来絵詞」雑考 日本絵巻大成14 中央公論社 1978.10
- 12 荻野三七彦 「竹崎季長絵詞」の研究史 日本絵巻大成14 中央公論社 1978.10
- 13 小松茂美 「蒙古襲来絵詞」解説 日本の絵巻13 中央公論社 1988.4
- 14 鈴木敬三 蒙古襲来絵詞に現れたる武装について 上下 国学院雑誌 45.12-46.3 1939.12-40.3

- 15 鈴木敬三 「蒙古襲来絵詞」覚書 日本史籍論集下 1969.3
- 16 佐藤鉄太郎 蒙古襲来絵詞の改竄と手直しについて
中村学園大学短期大学部研究紀要36 2004
- 17 佐藤鉄太郎 蒙古襲来絵詞の遺存 中村学園研究紀要29
1997
- 18 平治物語絵巻・蒙古襲来絵詞 日本絵巻物全集9 角川書
店 1963.12
- 19 池田忍 「平治物語絵巻」に見る理想の武士像 美術史
138 1996.3

参照挿図

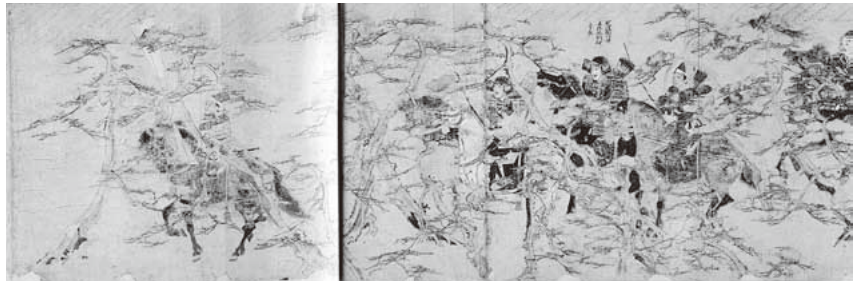


図1



図2



図3

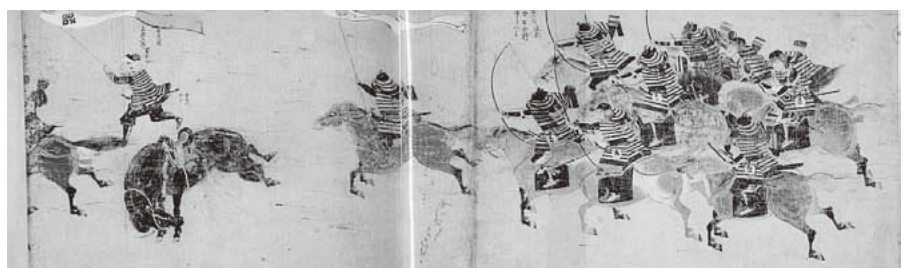


図4

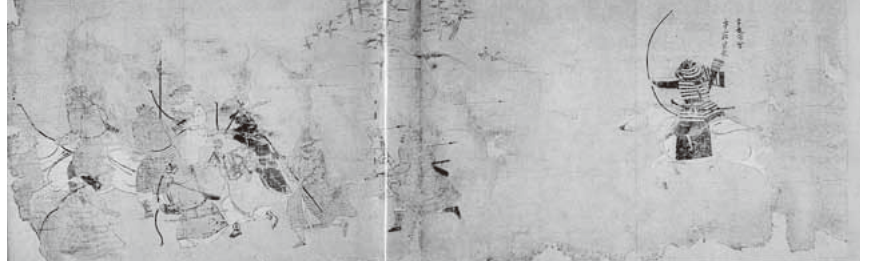


图5

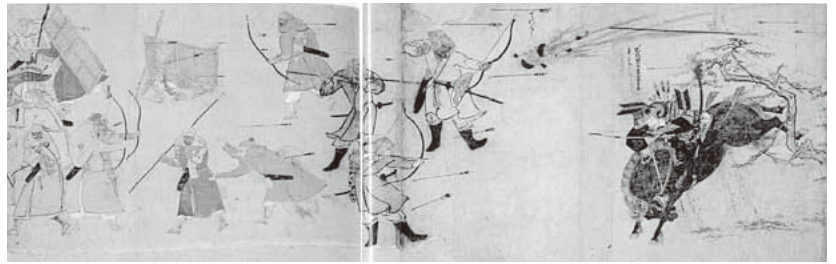


图6

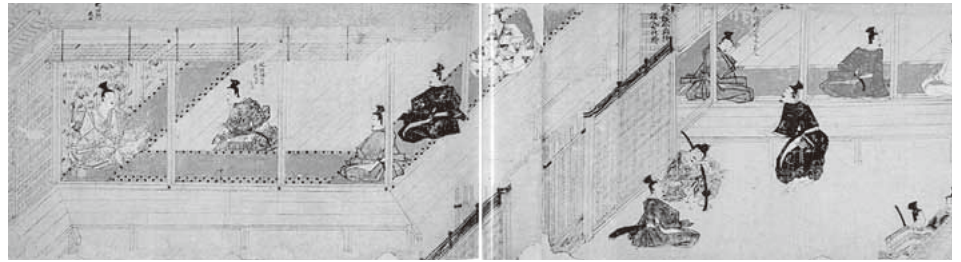


图7



图8



図9

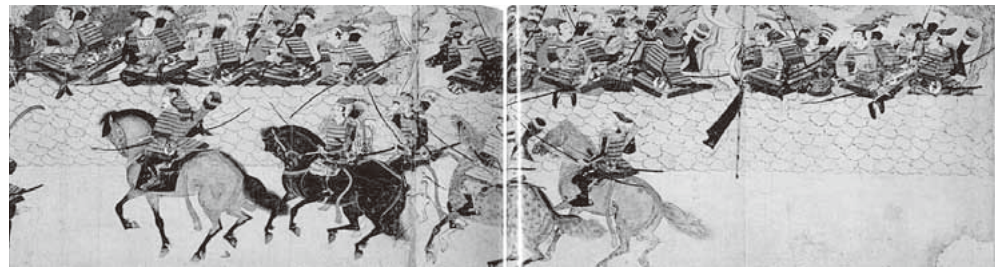


図10

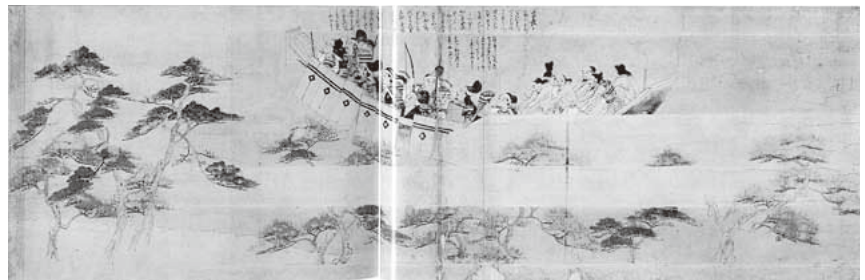


図11



図12

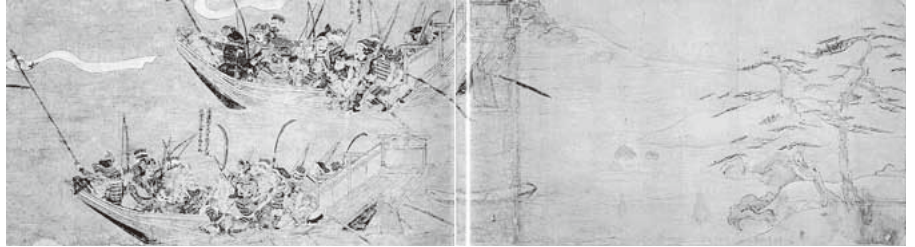


图 13



图 14

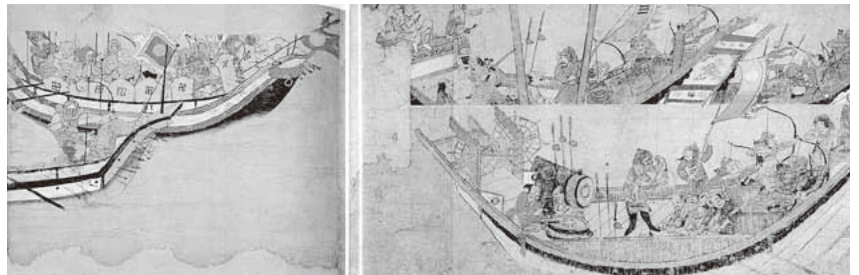


图 15

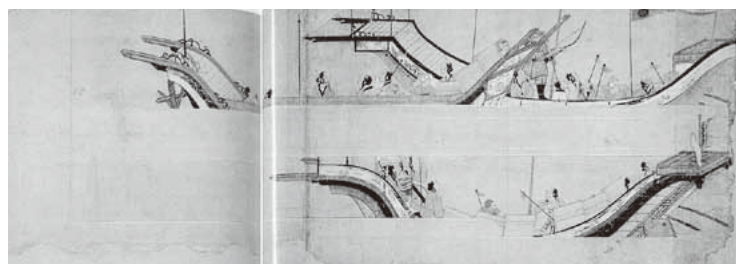


图 16



図17



図18

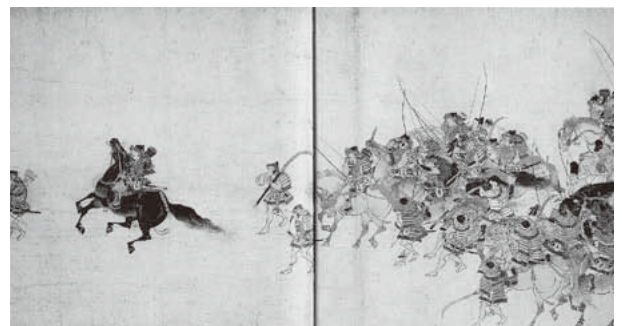


図19